

ティーチング・ポートフォリオ

史学科 高津 純也

(記入日： 2025年 9月 30日)

1 教育の責任 (何をやっているか：担当科目)

「アジア史研究入門(1)」(1年前期必修)、「アジア史概説(1)」(2年後期必修)、「アジア史演習(1)」(3年選必)、「東アジア史」(3~4年後期選必) など

2 理念 (なぜやっているか：教育目標)

日本を含む上位ブロックである東アジア世界の歴史・文化・社会について学ぶこと、また自ら調べ自ら考えること、その結果をまとめて発表や討論に臨むことなどによって、現在および未来をよりよく生きるための教養、および社会で活躍するためのスキルを身につけることを目標とする。

3 方法 (どのようにやっているか：実践の工夫)

「アジア史研究入門(1)」においては、課題提出の機会において、知識を問うような課題や正解を求めるような課題ではなく、一つの歴史的事項に対して学生に「それはなぜだと思うか」を考えて記述させるような課題を与えている。「アジア史概説(1)」においては、学期末試験の設問を事前に公表するとともに、試験の場に授業ノートを持ち込み可とし(但し手書きのものに限る)、事前に回答の骨子もしくは回答そのものを準備させた上で当日論述させるという形をとっている。「東アジア史」においては、授業内容に関連するようなテーマを自ら設定してレポートを作成するという課題を与えている。これらは全て、歴史事項についてその知識量を競うのではなく、その意義や背景・影響まで含めて理解した上で自ら考察して論述するという歴史学の本質に馴染み、高校の歴史の授業スタイルから思考法を転換することを促すことを目的とする。また「アジア史演習(1)」においては、東アジア史に関するテーマを自らの興味関心に応じて設定してレポートするという授業形態の中で、発表者に対して質疑を行うことを参加者全員に課し、その結果に応じた追加発表を次回までに作成するというタスクを導入することで、毎回の発表における緊張感や参加者の一体感を維持し、また発表者の対応力を向上させることを企図した。

4 成果（どうだったか：結果と評価）

「アジア史研究入門(1)」においては、受講者のほとんどが、思考の深浅の差こそあれ、歴史的事項の背景や原因について自力で考えたり、複数の事項について共通点や相違点を自ら抽出することに挑んでいることが確認できた（エビデンス1）。「アジア史概説(1)」においては、授業内で説明したことを問うた試験に対し、自らのノートなどを基に授業内の説明を再現しようとしていることが確認できた（エビデンス2）。「東アジア史」においては、自由度の高いレポート課題に対し、自らの興味関心について自問自答し、それに基づいて書籍を渉猟してレポートを作成していることが確認できた（エビデンス3）。「アジア史演習(1)」においては、学生同士が質疑応答を展開し、それに応じた追加発表を次回までに作成することで、発表者も質問者も知識や理解を一層深められていることを確認できた（エビデンス4）。

5 今後の目標（これからどうするか）

「アジア史研究入門(1)」については、上述したような、正解のない問いに対して自ら考えて回答する機会を増やしたいところであるが、学生の負担増との兼ね合いが難しいと考えている。「アジア史演習(1)」については、学生ごとに質疑への積極性にばらつきがあることが課題である。各人の性格や学力が異なっている以上当然ではあるが、当方の誘導の仕方などによってもっとスムーズに授業を展開できると感じている。ゼミの運営に関しては今後とも不断の改善を図ってゆきたい。

6 エビデンスとなるもの（資料の種類などの名称）

1. 「アジア史研究入門(1)」授業内提出物（提出後教員保管）
2. 「アジア史概説(1)」学期末試験答案（提出後採点・教員保管）
3. 「東アジア史」学期末レポート（提出後採点・教員保管）
4. 「アジア史演習(1)」各回の発表レジュメ（提出後教員保管）

ティーチング・ポートフォリオ

(記入日：2025年 9月 23日／史学科 辻 明日香)

1 教育の責任 (何をやっているか：担当科目)

基礎演習(1年前期必修科目、2単位)、コミュニケーション能力演習(2年前期選択必修科目、2単位)、アジア史演習(2) (3年通年選択必修科目、4単位)、史資料演習(4年通年必修科目、4単位)、アジア史研究入門(2) (1年後期必修科目、2単位)、アジア史概説(2) (2年前期必修科目、2単位)、西・南アジア史(3-4年後期選択必修科目、2単位)、観光文化(アジア)、観光歴史学、世界遺産で旅する(共通教育科目、2単位)など。

2 理念 (なぜやっているか：教育目標)

今年度は1年生に対しては大学生としての基礎、2年生に対しては社会人になるための基礎的な能力の養成に力を入れた。各学年の演習においては、学生の読解力と論理的思考のトレーニングに力を入れている。自ら問題を具体的に設定し、網羅的に資料を収集し、それを報告するというプロセスを通じて、自ら調べ学ぶという態度を身につける機会を提供する。講義においては、学生が歴史と現代世界に対する広い視野と深い洞察力を養うことと身近な問題と歴史上の出来事の関連性を探りながら学ぶことを目標としている。

3 方法 (どのようにやっているか：実践の工夫)

講義形式の科目では、まずはわかりやすい説明を心がけ、イメージがわきやすいように視覚資料を用意している。また、学生に考えたこと調べたことを書いたり、発表したりする時間を設けている。講義を受けている他の学生がどのようなことを考えているかということから刺激を受け、さらなる学びにつながっていると考える。

演習では自ら調べ学ぶという行為から達成感を受けられるよう、それぞれのレベルやペースに合わせながら課題を提案している。3、4年生の演習には相互にレポートを添削しあう時間を設けたが、教員からのコメントとともに、自分のレポートは同級生からはどのように見えるかという振り返りの時間となった。

4 成果 (どうだったか：結果と評価)

前期開講科目においては、例えばアジア史概説(2)ではリアクションペーパーの成果もあり(エビデンス 1)、歴史の流れを説明する記述問題に良い解答が相次いだ。専門科目の西南アジア史とアジア宗教史は授業アンケートにおける反応がとてもよかった(エビデンス 2)。基礎演習は通信制高校の出身で対面ゼミという形式に不慣れな学生が複数いたが、前期後半には慣れたようである。最終回の授業にて発言やレポート作成に対する苦手意識を克服しつつあるというコメントを複数得た。

5 今後の目標(これからどうするか)

他の教員の授業実践の方法からも学び、学生を飽きさせないような取り組みをしたい。また、学生については課題を提出したというところにとどまらず、授業の予習復習や調査を自ら積極的に取り組むよう促していきたい。

6 エビデンスとなるもの(資料の種類などの名称)

各授業のアンケートシート(エビデンス 1 非公開)

授業評価アンケート(エビデンス 2)

ティーチング・ポートフォリオ

史学科 堀部 猛

(記入日：2026年2月19日)

1 教育の責任（何をやっているか：担当科目）

2025年度の担当科目は以下のとおり。

通年

日本史演習（1）	（専門教育科目・選択必修）
史資料演習	（専門教育科目・必修）
博物館実習	（専門教育科目・選択）

前期

日本史概説（1）	（専門教育科目・必修）
博物館資料論	（専門教育科目・選択）
博物館経営論	（専門教育科目・選択）
博物館教育論	（専門教育科目・選択）
日本古代史	（専門教育科目・選択必修）

後期

日本史研究入門（2）	（専門教育科目・必修）
博物館概論	（専門教育科目・選択）
博物館展示論	（専門教育科目・選択）
博物館資料保存論	（専門教育科目・選択）

2 理念（なぜやっているか：教育目標）

担当科目は、博物館に関する専門教育科目と、歴史学に関する専門教育科目に大別される。

前者については、人文系の地域博物館の多様な実践例を踏まえ、学芸員として必要な知識・技能を身につけることを第一の目標としている。学芸員資格を取得しても、卒業後直ちに博物館や自治体に就職する学生は限られる。単に資格の取得にとどまらず、博物館が社会のなかで果たすべき役割を理解し、個々の学生が将来にわたって地域の博物館を利用し、各種事業に参加することを通じて地域に貢献できる人材の育成も目標としている。

後者の歴史学に関する科目については、遺された史資料をもとに過去を論理的に推察する力と、それをもとに現代と未来を見つめ、諸問題に対し主体的に考える力を養うことを目標としている。

3 方法（どのようにやっているか：実践の工夫）

○博物館に関する専門教育科目（講義科目）

「博物館法施行規則」に定める科目を体系的に履修できるよう、カリキュラムが設定されている。1年次に履修する「博物館概論」に始まり、2～3年次で展示論、資料論、経営論、資料保存論、教育論などで各論を学び、これらの履修を経たうえで「博物館実習」を履修する。一貫した体系のもとに個々の科目が位置付けられており、基礎的・理念的領域から実践的な技能へと段階的に習得していくことを意識している。

そのために、おもに以下のような方法で行った。

①Teams の活用

事前に Teams のファイル機能を利用して授業資料を配信し、予習を促している。資料画像などの視聴覚資料を増やして興味関心を高められるようにするとともに、重要な部分については空欄で配信し、学生が授業中に記入しながら集中して受講できるよう工夫している。

②課題の提示

博物館展示で議論の分かれる問題や、博物館の先進的取り組みなどについては授業中に「課題」を提示し、考えをまとめて報告してもらい、また他の学生の意見から学ぶ機会を設けている。

③実践的・具体的な教材の提供と体験

長い博物館勤務の経験で得たことをもとに授業は実践的であることを旨としている。掛軸などの実物資料を用いるとともに、実際の博物館において資料保存などのために用いる用具や機器も持ち込み、それらの使用方法などを説明し、実際に触れてもらうことで理解を高められるよう工夫している。

④丁寧なリアクション

学生の理解度を確認し、疑問に思ったことを質問できるようコメントシートの提出を求めている。次回の授業の冒頭で前回授業の復習を行うとともに、コメントシートに寄せられた質問や感想などを紹介し、回答や補足説明をすることで双方向の授業となるよう心掛けている。

○博物館に関する専門教育科目（「博物館実習」）

①実物資料の利用による技能の向上

学芸員資格の取得には、「博物館実習」の履修が必要になる。おもに夏季休暇中には1週間～10日間ほど実際の博物館で「館務実習」を行う。館務実習においては、実際の資料を取り扱う機会も多いことから、前期に掛軸や卷子、考古資料、茶道具などの取扱いを一通りできるよう実物資料を用いて技能向上は図り、スムーズに館務実習に臨めるような授業構成とした。後期には、資料の梱包やそのための梱包具の制作など、

講義と実技を織り交ぜながら実践的に進め、学芸員にとって必要な知識・技能の習得と向上に努めている。

②ノート作成

「館務実習」では、学生が持参した「実習日誌」にその日の活動を記録して提出することが一般的である。簡潔に素早くまとめる能力が求められるため、そのトレーニングも兼ね、「ノート」と称する A4 サイズ 1 枚のプリントを配布し、授業の要点をまとめ、感想や質問も記入して提出してもらうようにしている。「ノート」にまとめる作業を通じて知識・技能の定着を図り、館務実習に無理なく臨めるようにしている。

③丁寧なアクション

学生から提出された上記の「ノート」の内容や質問・感想について、コメントを書いて次の授業時に返却している。学生から寄せられた質問のうち共有すべき事柄について、返却に際して解説を行い、知識の更新を図るようにしている。

○歴史学に関する専門教育科目

講義形式の科目と、学生が調べて報告する演習形式の授業に大別される。歴史が「遠い過去の別の世界のお話」ではなく、「今、私たちが生きる現代と地続きである」ことを感得してもらうことを大切にしている。

①Teams の活用

上記の「博物館に関する専門教育科目」と同様に、事前に Teams のファイル機能を利用して授業資料を配信し、予習を促している。文字情報に偏重することがないように、実際の遺跡や資料の画像などの視聴覚資料を多用している。2024 度には、「スライドの進行速度が少し速く、スライドの前後関係がわかりづらい時があった」との意見が授業評価アンケートで寄せられたことを受け、今年度はテーマと構成がより明確になるようスライドの枚数を絞る工夫を行なった。

演習形式である「日本史演習（1）」では、前期・後期に課したレポートの作成・提出に Teams の課題機能を利用し、個別にコメントを付して返却した。

②史料読解の訓練

演習科目のうち 3 年生が履修する「日本史演習（1）」では、ほとんどの学生が初めて触れる史料（『令義解』）の輪読にスムーズに移行できるよう、辞書や史料の注釈書などの研究工具の使い方を図書館や学生研究室などで実践しながら示した。加えて、教員による模範報告を示しながら、関連する論文や史料の調べ方などを丁寧にレクチャーした。

③実践的な指導

4 年生が履修する「史資料演習」では、卒論作成に向けて夏季に章立て案について指導した。特に留意し、力を入れているのは、課題（問い）の提示から結論に至る論旨

の構成力の育成である。こうした課題（問い）解決のメソッドが、実社会においても様々な局面で応用できるよう目指した。

④丁寧なりアクション

コメントシートの利用は、上記の「博物館に関する専門教育科目」に概ね同じ。演習形式の授業では、準備段階で報告のポイントや調べるべき史料を事前に学生と協議・確認し、報告準備にあたっては疑問に思ったことなどをあらかじめ質問するよう促した。質問には遅くとも翌日には返信し、報告者にとってより達成感の高い学問経験となるよう心がけた。

4 成果（どうだったか：結果と評価）

以上について、教員としての自己評価と授業評価アンケートから導かれる結果と評価は以下のとおりである。

○博物館に関する専門教育科目（講義科目）

- ①「Teams の活用」について。概ね学生の理解の向上に有用であると評価している。予習を促すことで、スムーズに授業に入れる効果も大きい。様々な資料の画像をパワーポイントで示し、実際の掛軸なども用いることの効果は大きいと感じている。授業評価アンケート（「博物館資料論」）でも「実物の資料を見ながら授業を受けられるのでいいなと思います」という評価を受けた。
- ②「課題の提示」について。博物館が直面する諸課題をめぐって主体的な学習ができ、その効果は大きい。課題提示の回数や取り上げる問題を増やす必要性を認識している。
- ③「実践的・具体的な教材の提供と体験」について。実物資料のほか、資料保存のための様々な機器類（例えば温湿度計や照度計）や用具（薄葉紙など）なども積極的に使用し、手で触れてもらうことでより理解を深めることができていると受け止めている。
- ④「丁寧なりアクション」について。授業冒頭で、前回授業で回収したコメントシートの講評や質問への応答を行うことでより授業への理解が深くなっている手応えがある。授業評価アンケートでも、「毎回授業終わりに書くコメントシートのフィードバックを次の授業で行ってくださるので、疑問点や分からないところを解消できて前回の復習にもなり助かります」（博物館展示論）、「毎授業フィードバックをしたり、映像資料を用いたりしてくださるので分かりやすいです。コメントシートも質問や疑問を書いたら回答してくださるので質問や疑問が解消されてより理解がたまるような気がします」（博物館概論）などの意見が寄せられた。

○博物館に関する専門教育科目（「博物館実習」）

①実物資料の利用による技能の向上

掛軸や卷子、考古資料、茶道具などの取扱いを全員が複数回行うことで次第に扱いに慣れ、技能の向上・定着が見られた。夏季の館務実習の際には、資料を取扱う場面が

あっても自信をもって臨めた、との感想を聞くことができた。

②ノート作成

講義や解説を聞き、実践したことをまとめる力は、着実に向上したとみている。「館務実習」や見学実習でも速やかに実習日誌をまとめることができていた。

③丁寧なリアクション

学生から提出された「ノート」へのコメントを書き、それに基づき解説を行うことで、前回授業の復習と双方向のコミュニケーションを図ることができている。

○歴史学に関する専門教育科目

①「Teams の活用」について。上記の「博物館に関する専門教育科目」の同項目に概ね同じ。講義形式の授業では、前年度の「スライドの進行速度が少し速く、スライドの前後関係がわかりづらい時があった」との意見を受け、授業配信資料のスライドを絞ったが、理解が深まっているという手応えをコメントシートから受けている。進行速度などについての意見は、今年度は特段いただけていない。

演習形式ではレポートへのリアクションを、個々の学生の到達度にも合わせながら指導を行うことができた。

②「史料読解の訓練」について。演習科目（日本史演習（1））では、学生の報告に対し、教員側も訓読文を毎回提示し、読解のポイントを示すことで、史料の読解力が回をおうごとに向上していった。

③「実践的な指導」について。4年生の「史資料演習」では、先行研究から読み取るべきポイントをあらかじめ指定し、そのフォーマットに沿って整理して報告をしてもらった。漫然と「読む」「まとめる」ことで終わらず、学術論文とはどのような要件を備えているのかを読み解くことが、卒業論文作成の基礎の形成に結びついたと評価している。

④「丁寧なリアクション」について。講義形式の授業については、上記の「博物館に関する専門教育科目」の同項目に概ね同じ。演習形式の授業については、報告の準備途中で生じた疑問を事前に尋ねてくる学生が増え、充実した報告に結びつくことが多くなったと評価している。

5 今後の目標（これからどうするか）

概ね 2025 年度はシラバスに沿って授業を進行できていると評価している。「歴史学に関する専門教育科目」のうち講義科目では、前述のとおり授業配信資料のスライド枚数を減らすことで、単元のテーマがより伝わるよう変更を加えた。今後も学生の意見や反応に注意深く対応し、より充実した授業展開を目指して改良を重ねていきたい。演習形式の授業では、よりよい報告を目指す雰囲気醸成が各人の取り組みの深度に直結する。こうした雰囲気づく

りに必要な動機付けについて、さらなる工夫を重ねていきたい。

「博物館に関する専門教育科目」（講義科目）については、カリキュラムの体系を意識し、3-4年次の「館務実習」に学生が自信をもって臨めるよう、実践的な授業展開の継続と充実をめたい。今般の博物館法の改正では、「地域の多様な主体との連携」が新たに盛り込まれており、博物館の専任スタッフとならなくても、ボランティアや市民学芸員、同好会への参加など、多様なかたちで地域の博物館の運営に関わることが今後一層増えていくことが予想される。学芸員資格の取得を目先の就職の問題に止めず、ライフステージという大きな枠のなかでその意味を捉え、豊かな人生につながるよう学生に伝えていきたい。

6 エビデンスとなるもの（資料の種類などの名称）

- 1 講義科目の授業資料。
- 2 演習科目（日本史演習・史資料演習）で配布した資料。
- 3 博物館実習での配布資料及び学生が提出した授業ノート。
- 4 コメントシート。博物館実習の「ノート」（写）。
- 5 演習科目での学生の報告レジュメ、レポート。

ティーチング・ポートフォリオ

学科：史学科 氏名：志村 瑠璃

(記入日：2026年1月26日)

1 教育の責任（何をやっているか：担当科目）

【図書館に関する専門教育科目】

図書館概論，図書館制度・経営論，図書館サービス概論，情報サービス論，情報サービス演習(1)，情報サービス演習(2)，情報資源組織論，情報資源組織演習(1)，情報資源組織演習(2)，図書館情報資源概論，図書館情報資源特論，図書・図書館史

【共通教育科目】

情報リテラシー，キャリア・プランニング IV(1)，キャリア・プランニング IV(2)

2 理念（なぜやっているか：教育目標）

図書館について学ぶことを通して、社会における共時的・通時的な知識の循環について検討できるようになることを目指している。知識の幅広さについて知ることを通して、情報の利用に関わる実践的な技術を身につけることを目標としている。

3 方法（どのようにやっているか：実践の工夫）

全科目において、授業終了時には毎回リアクションペーパーとして感想や質問の提出を求め、学修内容を見直す時間を設けた。特に重要な質問や興味深い意見については、次回授業の冒頭に匿名で全体に共有し、多角的な視点の育成を図った。

講義科目では、学生が授業内容に注意を向け続けられるよう、重要な用語や概念を空欄とした穴埋め形式の配布資料を用いた。全15回の折り返し時点である第8回目には、専門用語の理解度や基礎的な概念の応用力を確認する小テストを実施し、学生が図書館についての基礎的知識を確実に修得できているかを確認するとともに、学生自身が学修内容を振り返る機会を設けた。

「図書館サービス論」等の基礎的な科目では、基礎的知識を教授した後で、

具体例として我孫子市民図書館や千葉県立図書館の実践を検討してみせることで、基礎的知識を図書館の実践と結びつけるよう促した。一方で、「情報サービス演習(1)」などの演習科目では、まずは図書館における実践を最終的な到達目標として例示し、その後に課題に取り組ませることで、学生が課題の意図を理解して取り組めるようにした。他にも、以前に取り組んだ課題と類似した課題を意図的に織り交ぜ、一度目はできなかった課題が二度目ではできたという経験をさせることで、学生が復習の成果や自身の成長を実感できるよう工夫した。

4 成果（どうだったか：結果と評価）

教員相互の授業参観では、先生方に「図書館制度・経営論」を参観いただき、アンケートにてフィードバックを頂戴した。授業内容については、我孫子市立図書館の予算・決算資料を例示したことに関し、具体的に話が進んでわかりやすいとのコメントをいただいた。配布資料については、体系的で見やすい、穴埋め形式が良いとの評価を受けた。

5 今後の目標（これからどうするか）

図書館について批判的に検討できるようになるために、計 15 科目で修得する図書館に関する知識が体系化するよう促したい。そのために、他科目で学んだ内容への言及を増やし、各科目で学んだ内容の関連を明示する。授業内容を抽象と具体が明らかな構成にし、基礎的知識と具体的実践を照らし合わせて検討してみせていることが学生に伝わるようにする。

6 エビデンスとなるもの（資料の種類などの名称）

- ・リアクションペーパー
- ・学生から提出された演習課題等の成果物
- ・2025 年度前期授業評価アンケート
- ・2025 年度後期授業評価アンケート
- ・2025 年度後期教員相互の授業参観アンケート

ティーチング・ポートフォリオ

史学科 長崎健吾

(記入日：2025年 8月 2日)

1 教育の責任 (何をやっているか：担当科目)

文献購読 (1) (2年前期選択必修科目・2単位)、日本史概説 (1) (2年前期必修科目・2単位)、日本史研究入門 (1) (1年前期必修科目・2単位)、史資料演習 (4年通年必修科目・4単位)、日本史演習 (2) (3年通年必修科目・4単位)、基礎ゼミナール (1年前期必修科目・2単位)、日本中世史 (3～4年前期選択科目・2単位)、日本史研究入門 (2) (1年後期必修科目・2単位)、日本女性史 (2) (3～4年後期選択科目・2単位)、歴史学 (後期共通教育科目・2単位)、文献購読 (2) (2年後期選択必修科目・2単位)、文献購読演習 (2年後期必修科目・2単位)、古文書学 (3～4年後期選択科目・2単位)、総合講座 (3) (1年後期必修科目・2単位)

2 理念 (なぜやっているか：教育目標)

演習においては学術的な文献の批判的読解力、歴史学研究に必要な史料読解力、およびこれらを伸ばす過程において学生相互で議論する力の育成に力を入れている。選択科目の授業においては、過去の社会について学ぶなかで現代社会の問題の根源を洞察する力を養うことを目指している。

3 方法（どのようにやっているか：実践の工夫）

講義形式の授業においては各回の授業後にコメントシートを提出してもらい、寄せられた疑問や感想のうち特に重要なものを次回の授業冒頭で紹介し、発展的な解説を加えている。演習においては各学生に毎回最低1度の発言を義務付け、報告内容が不十分な場合は追加の課題を課して次回の演習冒頭で短い報告を課している。取り上げる題材（論文や史料など）の決定においてはいくつか候補を挙げつつ学生の意見を聞きながら決定し、演習が学生の興味関心に沿ったものとなるよう努めている。また、グループワークやペアワークなどアクティブラーニングの機会を適宜もうけている。今年度から衣食住など生活文化にかかわる内容を積極的に講義に取り入れ、身近なテーマを通じて歴史学的な思考を学べるよう工夫している。

4 成果（どうだったか：結果と評価）

昨年度は授業への要望としてはスライドが見づらい・内容が多いなので意見が寄せられたため、試験的に紙のレジュメを用いたところ、おおむね好評だった。衣食住について学生に自由にテーマを決めてもらって行った報告も、充実したものになった。

5 今後の目標（これからどうするか）

授業で扱う内容を精選するとともに、授業内での質疑やグループワークを通じたやりとりなど、学生との対話を通じた学習の比重を高めて行きたい。文献購読や演習において史料をあつかう際は、あらかじめ中世漢文の語法などについてももう少し簡潔かつ体系的に教える方法を考えて行きたい。また、1年・2年次の講義内容と3年演習の内容につながりを持たせ、学生が学習の成果を実感できるよう工夫していきたい。今年度から取り入れている衣食住のテーマを中世都市社会史の大きな文脈のなかに位置づけなおし、学生の関心と歴史学の議論をつなぐような授業を考えたい。

6 エビデンスとなるもの（資料の種類などの名称）

- ・講義形式の授業で毎回課しているコメントシート（非公開）
- ・学生から提出されたレポート等の成果物
- ・2025年度前期授業評価アンケート